

〈原著論文〉

## 高校福祉科卒業生のキャリア自己概念 ～現在の職業と卒業年度コーホート別の傾向～\*

保 正 友 子\*\*

### I はじめに

#### 1 問題の所在

1986年に介護福祉士受験が可能な福祉系高等学校（以下、「高校福祉科」とする）が創設されてから20年以上が経過し、2007年5月現在では9万余名の卒業生が多様な分野で活躍している。しかしながら、全国規模での卒業生対象の実態調査は未だ実施されておらず、卒業生たちがどのような職業に就き、どのような生活を送っているのかは全国的には明らかにされていない。現在の卒業生たちが置かれている状況を明らかにすることで、高校福祉科のあり方を遡って検討する素材や、高校卒業後の職業生活等への支援方策を検討するための基礎資料が得られると考える。

そこで筆者らは、2007年1月から2月にかけて全国の高校福祉科卒業生1,229人を対象とした郵送によるアンケート調査を実施し、高校福祉科卒業生の生活実態の把握を行った。そのなかの質問項目の一つとして、今後の将来設計についての自由記述を設定した。本論文はその自由記述の内容を、現在従事している職業タイプと卒業年度別コーホートの2つの軸から分析することにより、これまで明らかにされてこなかった高校福祉科卒業生のキャリア自己概念を明らかにする試みである。それにより、高校福祉科卒業生に対するキャリア発達の支援方策を検討するための基礎資料を得ることが目的である。

介護職のキャリア発達に焦点を当てた研究としては染谷俣子らのもの<sup>(1)</sup>があるが、キャリア自己概念に焦点化されているわけではない。また、ソーシャルワーカーのキャリア発達については、筆者らがいくらかの研究<sup>(2)</sup>に取り組んできたが、介護職に関するキャリアに関する研究は、上記以外では探し当てることができなかった。そのため、本研究は介護福祉分野では新しい試みとして位置づくものである。

---

※The career self-concept of the welfare high school graduate.—The tendency according to the present occupation and graduation year cohort.

※※Tomoko HOSHO立正大学社会福祉学部社会福祉学科

キーワード：高校福祉科卒業生、キャリア自己概念、現在の職業、卒業年度コーホート

## 2 キャリア自己概念

本論文におけるキャリアとは、仕事生活だけでなく生活全般を考慮に入れている点において、多様な高校福祉科卒業生のライフスタイルに合致すると考えたため、金井壽宏による以下の定義を使用する。「成人になってフルタイムで働き始めて以降、生活ないし人生（life）全体を基盤にして繰り上げられる長期的な（通常は何十年にも及ぶ）仕事生活における具体的な職務・職種・職能での諸経験の連続と（大きな）節目での選択が生み出していく回顧的意味づけ（とりわけ、一見すると連続性が低い経験と経験の間の意味づけや統合）と将来構想・展望のパターン」<sup>(3)</sup>。

一方キャリア自己概念とは、ドナルド・スーパーによって構築された理論である。岡田昌毅はスーパーが提唱した自己概念について、以下のように説明している。「個人が自分自身をどのように感じているか、自分の価値、興味、能力がいかなるものかということについて、『個人が主観的に形成してきた自己についての概念』（主観的自己）と『他者からの客観的なフィード・バックに基づき自己によって形成されてきた自己についての概念』（客観的自己）の両者が、個人の経験を統合して構築されていく概念」であり、多面的な構造の自己概念のうち「キャリアに関する側面がキャリア自己概念であり、キャリア発達をとおして形成されていく」とする<sup>(4)</sup>。そして、スーパーの造語である「職業的語り（Occutalk）」という言葉を用い、ある人が「私は大工になりたい」と言ったとすると、それは単に希望職業を述べているだけではなく、自己概念を表現しているとする。

この考え方によると、高校福祉科卒業生に対して「あなたはどのような将来設計をもっていますか。自由に書いてください」という問いに対して記述される内容は、高校福祉科卒業生のキャリア自己概念を表していることになる。そしてまた、「キャリア自己概念は1つではないし、またある時期に決定されるものではない。自己と他者、自己と環境（複数）との相互作用のなかで修正、調整されると仮定される」ものである<sup>(5)</sup>。以上の点から本研究は、2007年の調査時点において高校福祉科卒業生が抱えているキャリア自己概念を切り取る試みといえよう。

## II 調査概要と分析方法

### 1 調査の概要

調査対象は、1993年度以前に設置された全国の高校福祉科34校のうち協力を得られた19校における、1993年度、1997年度、2001年度卒業生のうちの1,129人である。調査方法は、郵送による質問紙調査とし、各協力校が作成した宛名リストにもとづき、協力校または筆者らが1,229人に質問紙を郵送したが、うち100通が宛名不明で不達だった。

回収数は202通（回収率17.9%）で、有効回収数は197通（有効回収率17.4%）である。内訳は、1993年度卒40人、1997年度卒69人、2001年度卒83人、卒業年次不明5人であり、女性177人、男性20人であった。

筆者らの実施したアンケート調査票は三部構成で、①高校福祉科について、②高校卒業後について、③ライフイベントの全33項目から成り立っている。アンケート調査の最後の設問として、「あなたはどのような将来設計をもっていますか。自由に書いてください」という自由記述を設定した。

## 2 分析対象

本論文では、卒業生がどのような将来設計を立てているのかについて、現在就いている職業タイプ別と卒業年度コーホート別に考察を行う。全体では197人中121人が設問に答えていた。

まず、現在就いている職業に基づいて、調査回答者197人を7つの職業タイプに分類した。内訳は①介護・相談援助の職業に就いている群(96人)(以下、「タイプⅠ」とする)、②上記以外の医療職も含む福祉と関わりのある職業に就いている群(40人)(以下、「タイプⅡ」とする)、③福祉と関わりのない職業に就いている群(24人)(以下、「タイプⅢ」とする)、④専業主婦群(27人)、⑤無職群(6人)、⑥学生群(2人)、⑦分類不明群(2人)である。

本論文では、設問に回答した現在何らかの職業に従事しているタイプⅠの56人、タイプⅡの25人、タイプⅢの11人の計92人分の回答を分析対象とする。ただし、各年度の卒業生の回答をまとめて集約したため、卒業年度毎の傾向はここでは見えてこない。

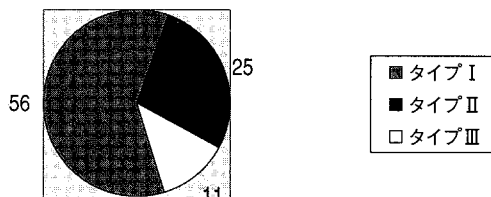
次に、タイプⅠに焦点化した卒業年度コーホート別の分析を行う。対象者は卒業年度不明の2人を除いた54人分の回答である。調査時点での対象者の年齢は、1993年度卒業生(10人)は31歳ないし32歳、1997年度卒業生(18人)は27歳ないし28歳、2001年度卒業生(26人)は23歳ないし24歳である。介護・相談援助職に従事している各年度の卒業生たちが「キャリア・サイクルの段階」ではどこに位置づくのか、キャリア発達のうえでどのような課題に直面する可能性があるのかについて分析する。

本来であれば、タイプと卒業年度を組み合わせで9つに分割することも可能であるが、度数が121人と少ないため、細分化しすぎることによりかえって傾向が見えにくくなることを恐れてタイプ別と卒業年度コーホート別の2つの軸とした。

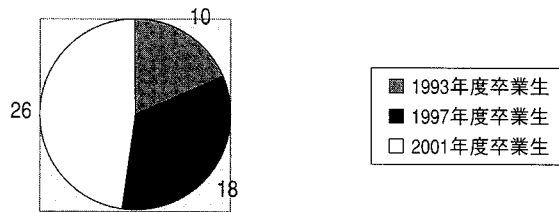
本研究の対象者は、図1のとおりである。

図1 本研究の対象者の範囲

タイプ別の対象者数



タイプⅠの卒業年度コーホート別対象者数



### 3 分析方法

自由記述の内容は、表1の12項目にそってコーディングを行った。一つの文章のなかにいくつかの要素が含まれている場合には、複数の項目にカウントした。

表1 将来設計についての分析項目

項目名称	内容	具体例
福祉の道	今後、福祉の道を進んでいくことが記述してある場合	私の体が動くまで介護職でありたい。
医療の道	今後、医療の道を進んでいくことが記述してある場合	自分の看護観をしっかり持って、いつまでも患者のニーズに応えることのできる看護師になりたい。
その他の道	今後、福祉・医療以外の道を進んでいくことが記述してある場合	定年後は私塾を開き後輩教育につとめたい。
福祉への関わり	直接的ではないが福祉に携わりたいことが記述してある場合	介護というのは職場に復帰しなくても身近でも起こることなので家庭でもできる場があれば進んでしたいと思う。
延長	現在行っていることを続けていく旨が記述してある場合	これからも利用者の方が毎日笑顔で過ごせるようにお手伝いをしていきたい。
キャリアアップ	資格取得等のキャリアアップの方向性が記述してある場合	いずれはケアマネジャーの資格をとり、体力がつづく限りこの仕事を続けたい。
復職	現在仕事に就いていないが将来復職したい意向が記述してある場合	育児がある程度落ち着いたらホームヘルパーとして働きたい。
転職	現在と異なる仕事への転職の意向が記述してある場合	いずれは施設の相談員又は病院の医療ソーシャルワーカーになりたい。
独立	事業所を立ち上げるなど独立への意向が記述してある場合	自分の施設もしくは事業所を持ちたい！！
生きがい	プライベートの充実など仕事以外について記述してある場合	当面はマイホームを建てるのが目標である。
模索	将来の方向性を模索している場合	周りはケアマネジャーを取得する中どうしようかと悩み中。
未定・無	将来の方向性が決まっていないか、無と記述してある場合	まだ、はっきりとは持っていない。

Ⅲ 分析結果と考察

1 全体の傾向

職業タイプ別とタイプⅠのコーホート別のカウント結果は表2のとおりで、上段が人数、下段が割合である。各タイプの度数が異なるため単純な比較はできないが、タイプ毎の大体の傾向を把握することは可能と考える。

表2 将来設計についての項目該当数

	福祉の道	医療の道	その他の道	福祉への関わり	延長	キャリアアップ	復職	転職	独立	生きがい	模索	未定・無
タイプⅠ 56人	47 83.9%	2 3.6%	7 12.5%	1 1.8%	21 37.5%	22 39.3%	3 5.4%	5 8.9%	10 17.9%	10 17.9%	1 1.8%	3 5.4%
タイプⅡ 25人	10 40%	11 44%	5 20%	1 4%	6 24%	7 28%	1 4%	4 16%	2 8%	2 8%	1 4%	1 4%
タイプⅢ 11人	5 45.5%	0 0%	6 54.5%	4 36.4%	2 18.2%	1 9.1%	2 18.2%	0 0%	0 0%	4 36.4%	1 9.1%	0 0%
1993 10人	8 80%	0 0%	3 30%	0 0%	4 40%	1 10%	0 0%	0 0%	3 30%	1 10%	1 10%	1 10%
1997 18人	15 83.3%	1 5.6%	2 11.1%	0 0%	9 50%	6 33.3%	1 5.6%	3 16.7%	3 16.7%	3 16.7%	0 0%	1 5.6%
2001 26人	22 84.6%	1 3.8%	2 7.7%	1 3.8%	8 30.8%	14 53.8%	2 7.7%	2 7.7%	2 7.7%	6 23.1%	0 0%	1 3.8%

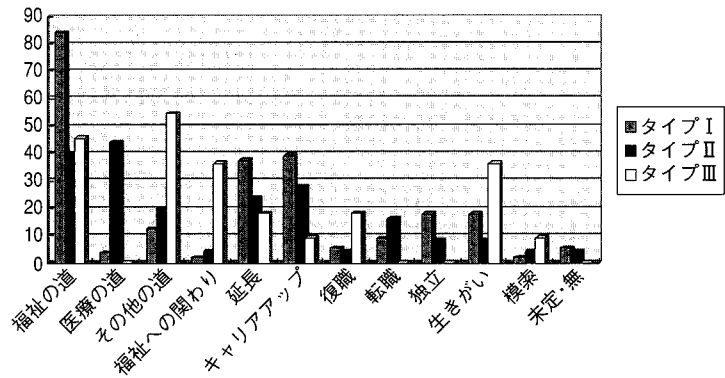
2 職業タイプ別のキャリア自己概念の傾向

①分析結果

表2のうち、職業タイプ別の結果をまとめたのが図3である。全体を通してみると、現在従事している職業の違いがキャリア自己概念に反映していることがわかる。また、濃淡はあるものの、どのタイプも何らかの形で今後も福祉に関わりたいという意向が読み取れた。

以下、タイプ別の傾向をみていく。

図3 タイプ別項目割合の比較（縦軸はパーセント）



## ②タイプⅠの傾向

タイプⅠの割合が他のタイプと比べて高かったのは、「福祉の道」「延長」「キャリアアップ」「独立」であった。このことから、現在行っている福祉の仕事を今後も継続し続けながら、ケアマネジャー等の資格を取得してキャリアアップをはかりたいという志向性がみられた。さらに、他のタイプよりも、将来、自らが事業所を運営したいという希望を持っている人も多かった。上記に該当する具体的なコメントは、以下のとおりである。

- ・ 「福祉の道」「延長」に該当する在宅介護分野で働く男性：生涯、介護福祉士。介護を通して利用者の命と向き合っていく、将来の自分が安心出来る介護環境であるがための足場作り。
- ・ 「福祉の道」「独立」に該当する居宅介護支援事業所で働く女性：今はお金を持っている人は家で生活が難しくなったら、施設という生活の場があるが、お金がない人は施設に入りたくても特養は順番待ちでなかなか難しい。そういう人達が安心して生活できるような場所の提供ができるようにしたい。介護保険にとらわれなくてもいいのではないかと思う。
- ・ 「福祉の道」「キャリアアップ」「転職」に該当するケアハウスで働く女性：社会福祉士、ケアマネジャー資格をとり、ケアマネジャーを経験し、ホームヘルパーも経験し、いずれは、施設の相談員又は病院の医療ソーシャルワーカーになりたい。
- ・ 「医療の道」「キャリアアップ」に該当する看護学校に合格して障害者福祉施設を退職する女性：今春より看護学校へ入学する。卒業後は病棟勤務の看護師として経験を積み、いずれは地域医療に携わる看護師として、地域社会に貢献していきたいと思っている。

タイプⅠへの支援の方向性としては、現在従事している介護職が今後も継続できるための待遇改善、各種の資格取得に向けた職場内での支援システムの整備、独立開業に向けたノウハウ獲得の支援が考えられる。

## ③タイプⅡの傾向

タイプⅡについては、当然のことながら「医療の道」が他のタイプより割合が高く、次いで「福祉の道」「キャリアアップ」「延長」が多かった。「転職」の割合も他のタイプより高かった。このことから、現在行っている医療の仕事や介護・相談援助以外の福祉の仕事を続けようと考えている傾向がみられる一方で、転職を考えている人もいることがわかる。具体的なコメントは以下のとおりである。

- ・ 「医療の道」「延長」に該当する病院看護師の女性：自分の看護観をしっかりと持って、いつまでも患者のニーズに応えることができる看護師になりたい。
- ・ 「福祉の道」「転職」に該当する保育所保育士の女性：現在、保育の現場で働いているが、高校でせっかく介護の資格を取得したので、介護現場で働いてみたい。
- ・ 「その他の道」「キャリアアップ」「生きがい」に該当する養護施設栄養士の女性：管理栄養士になりたい。

養士の資格取得, よりよい人間関係。結婚しても仕事をする。習いごともしたい。

タイプⅡへの支援の方向としては, やはり現在従事している職業に引き続き従事していけるような待遇の充実に加え, スムーズな転職が可能となるサポートシステムの構築が挙げられる。

#### ④タイプⅢの傾向

タイプⅢについては, 「その他の道」「福祉への関わり」「生きがい」が他のタイプより割合が高かった。このことから, 福祉・医療以外の仕事に携わりながらも, 何らかの形で福祉への関わりを持ち, 生きがいを追求したいと考えている傾向がみられた。具体的なコメントは以下のとおりである。

- ・ 「福祉の道」「生きがい」「模索」に該当する一般企業勤務の男性：今でも人のためになる福祉の仕事に就きたい気持ちはあるが, 仕事の重さ, 給料面から見ても難しいかなと思う。当面はマイホームを建てるのが目標である。定年を迎える頃にまだ人のために仕事をしたという強い気持ちがあれば, 福祉に携わりたいと思う。
- ・ 「その他の道」「福祉への関わり」「延長」に該当する自営で介護タクシー会社を経営する女性：現在は介護の現場を離れているけれど, 将来的に主人の親, 自分の親, また福祉の現場への復帰と何があるか人生わからないが, 介護とは必ず役立つものと思っている。今まで経験してきた事を活かせるようにしたいと思っている。今は自営業の主人を支えて違う職種だが, これからも頑張っていこうと思う。
- ・ 「その他の道」「福祉への関わり」に該当するペットショップ勤務の女性：移動できるペットショップ, またはペットショップのお店をもつ。お年寄り, 障害を持つ人が気軽にたのめる店をもつ。

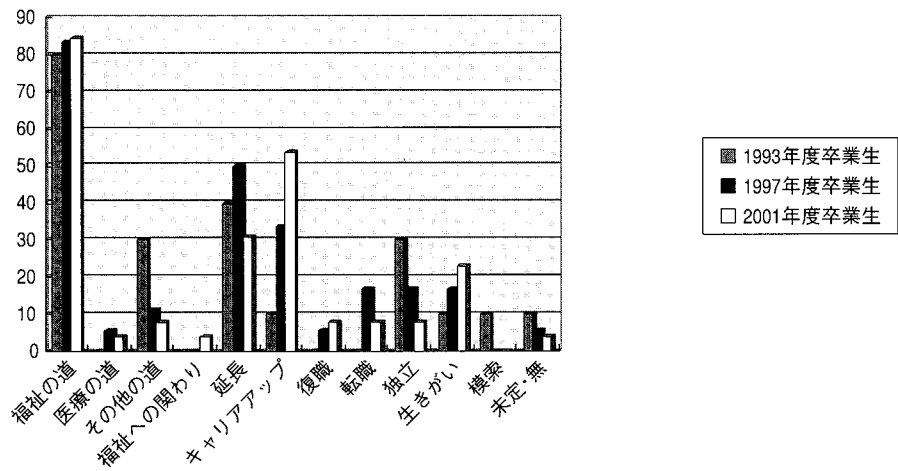
タイプⅢへの支援の方向性としては, 高校で学んだ福祉の知識・技術が活かせる機会の充実が挙げられる。

### 3 卒業年度コーホート別のキャリア自己概念の傾向

#### ①分析結果

表2の結果をまとめたのが図4である。どの年度も「福祉の道」が8割を超えていることがわかる。

図4 卒業年度別項目割合の比較（縦軸はパーセント）



以下、各コーホートの傾向を明らかにし、キャリアの発達段階ではそれぞれがどの段階に位置づくのかを考察する。その際に活用するのは、エドガー H. シャインの「キャリア・サイクルの段階」である<sup>(6)</sup>。シャインは生物社会的ライフサイクルと密接な関係のあるキャリア・サイクルについて、表3のように整理している。アメリカの企業勤務者を対象とした研究に基づき、1978年に出版された研究書であるがために、現在の日本の介護福祉労働者の実情とは厳密には合致しないとはいえ、おおよその目安を立てるのには参考になるといえよう。

表3 キャリア・サイクルの段階

段階	ステージ	年齢	そのステージでの役割
1	成長，空想，探求	0～21歳	学生，大志を抱く人，求職者
組織ないし職業への参入			
2	仕事の世界へのエントリー	16～25歳	スカウトされた新人，新入者
3	基本訓練	16～25歳	被訓練者，初心者
4	キャリア初期の正社員資格	17～30歳	新しいが正式のメンバー
5	正社員資格，キャリア中期	25歳以降	正社員，在職権を得たメンバー，終身メンバー，監督者，管理者（この段階に留まる人もいよう）
6	キャリア中期の危機	35～45歳	
7 A	非指導者役にあるキャリア後期	40歳から引退まで	重要メンバー，個人的貢献者あるいは役立たず（多くの人びとはこの段階に留まる）
部内者化境界線と階層境界線の通過			



7 B	指導者役にあるキャリア後期	若くして指導者役につく者もいようが、指導者役は依然、キャリア「後期」と考えられるだろう	全般管理者、幹部、上級パートナー、社内企業家、上級スタッフ
8	衰えおよび離脱	40歳から引退まで；衰えの始まる年齢は人により異なる	
組織ないし職業からの退出			
9	引退		

※エドガー・H. シャイン 前掲書(6)pp.43—47の表より筆者が再構成、表現は原文のまま

## ②1993年度卒業生の傾向

1993年度卒業生で他の年度よりも割合が高かった項目は「その他の道」と「独立」であった。

調査実施時点で31, 32歳の卒業生は、高校卒業後に13, 14年のキャリアを積んできている。表3によると「5. 正社員資格, キャリア中期」のステージである。シャインはこの時期に直面する一般的問題として、「専門を選び、それにどれだけ関わるようになるかを決める」「組織のなかで明確なアイデンティティーを確立し、目立つようになる」「抱負, 求めている前進の型, 進度を測定するための目標などによって、自分の長期のキャリア計画を開発する」等を挙げている<sup>(7)</sup>。

シャインが提唱するように、1993年度卒業生はすでに介護・相談援助の業務においては中堅であり、今後、自分で事業所を立ち上げて独立するという目処が立ち始める頃であろう。「福祉の道」「延長」「独立」に該当する女性は次のように述べている。「私は3人の子供達がある程度すだってから、自分で幸齢（ママ）者の最期の看取りの人生に私は一緒に出来る所を作りその幸齢者の死の迎え方を尊重してどのように最期を迎え人生という道をおえるのか手伝いをしたいと思います。私の体が動くまで介護職でありたいです。介護職は私にとって生きがいであり楽しみです！」。

本調査を行う前のプレ調査として実施した、数人の高校福祉科卒業生へのインタビュー調査でも「高校時代の友人とホームヘルパー事業所やグループホームを立ち上げたい」と回答していた人が数人いたことは本調査結果を裏付けるものである。

また、現在行っていることを今後も引き続き行っていくのか、「その他の道」へ転職するのかを模索する人もいることがうかがえる。「福祉の道」「その他の道」「生きがい」に該当した女性は次のように述べている。「福祉会（ママ）は人間があたたかいと感じています。体力が続く限り頑張りたい。でも将来的には早期リタイアし、趣味の料理、お菓子にてお店を開き、いこいの場を作りたい」。

今後は「6. キャリア中期の危機」段階を迎え、これまでの自分の歩みを再評価して、今後の進むべき道を選択する帰路に立たされる人もいないのではないかと予測される。

### ③1997年度卒業生の傾向

1997年度卒業生で割合が高かった項目は、「延長」と「転職」であった。

調査実施時点で27、28歳の卒業生は、高校卒業後に10、11年のキャリアを積んできている。表3によると「4. キャリア初期の正社員資格」から「5. 正社員資格、キャリア中期」に該当する。キャリア初期の課題の一つとして、シャインは「昇進あるいは他分野への横断的キャリア成長の土台を築くため、特殊技術と専門知識を開発し示す」ことを挙げている<sup>(8)</sup>。

1993年度卒業生よりも1997年度卒業生はキャリア形成の途上にあるため、現在行っている介護・相談援助の仕事はこれからも引き続き行い、自らの専門性を確立していく志向性が強いと考えられる。「福祉の道」「延長」「独立」に該当した女性は次のように述べている。「自宅での生活を望む方が多い中、職場では、利用者の多さに毎日忙しく時間単位の訪問です。利用者、本人、家族の方への心のやすらぎや不安を少なく出来るよう時間にゆとりを持って関わりたい。独立し信頼を持ってもらい、もっと在宅での生活に安心してもらえるような関わりを持ちたい」。

その一方で、3人が転職を挙げていた。慌しい環境のもとで介護職を行うなかで、現在の環境を変えたいという姿が以下のコメントから伝わってくる。「福祉の道」「転職」に該当する女性「今の福祉は介護保険になり、書類（記録）ばかり増え利用者とゆっくり対応する余裕がゼロに近くなった。もっと少人数の老人とゆっくり対応していける場所で働けたらと思う」。

### ④2001年度卒業生の傾向

2001年度卒業生で多かった項目は、「キャリアアップ」と「生きがい」であった。

調査実施時点で23、24歳の卒業生は、高校卒業後に5、6年のキャリアを積んできている。表3によると「3. 基本訓練」から「4. キャリア初期の正社員資格」に該当する。基本訓練期に直面する一般的問題としてシャインが挙げているのは「できるだけ早く効果的なメンバーになる」「正規の貢献メンバーとして認められるようになる」等である。

これに照らし合わせると、自分が従事している職業においてキャリアアップをはかりたいという2001年度卒業生の意気込みは妥当なものと考えられよう。また、福祉に携わる人にとっては、今後、介護支援専門員資格を取得してキャリアアップしたいという志向性がみられた。「福祉の道」「キャリアアップ」に該当する女性は次のコメントを書いている。「現在、特養の介護職員として働きながら、社会福祉士の国試合格するために勉強しています。将来はケアマネの資格を取りたいと思っています。また、もしできたら保育士の資格も取りたいと思っています。これからもっと幅広い分野の勉強をしたいと思っています」。

その一方で、自らのプライベートを充実させたい志向性があるのも見逃せない。職業や生活様式の選択肢が多様化した時代背景を反映する結果とも考えられる。「生きがい」に該当する女性はただ一言「幸せな結婚」と書いていた。

いずれにしろ、それぞれの卒業生の将来設計が実現するよう、道筋の明示とその都度必要な

サポートの充実が望まれる。

#### IV おわりに

本研究では、高校福祉科卒業生の現在従事している職業別タイプと、卒業年度コーホート別に抱えているキャリア自己概念の傾向を照射してきた。

タイプ別では従事している職業の実態が異なるため、当然ながら反映される自己概念も異なっていたが、多かれ少なかれ福祉に携わりたい意向は読み取れた。これは高校福祉科教育の賜物といえるだろう。また、卒業年度別コーホートでは、3つのコーホートがそれぞれに位置するキャリア・サイクルにより、直面する課題が異なることが示唆された。

今後は、さらに度数を多くすることにより、結果の妥当性・信頼性を高めると同時に、どのような要因がキャリア自己概念に影響を及ぼすのかを探っていく必要がある。また、2007年時点の調査対象者のキャリア自己概念が、今後どのように変化していくのかの追跡調査も望まれるところである。

付記：本研究は独立行政法人学術情報振興会平成17年度～20年度における、科学研究費補助金・基盤研究(B)を受けて実施したものである。メンバーは、保正友子（立正大学）、田村真広（日本社会事業大学）、平野和弘（東洋大学）、田中泰恵（弘前大学大学院）、岡多枝子（日本福祉大学）、芦川裕美（三島高等学校）である。

この場を借りて、調査にご協力いただきました高校福祉科卒業生の皆様に感謝申し上げます。

#### 注

- (1) 染谷倭子編著（2007）『福祉労働者とキャリア形成～専門性は高まったか～』ミネルヴァ書房
- (2) 保正友子・鈴木真理子・竹沢昌子（2005）「ソーシャルワーカーの専門的力量形成とキャリア発達についての検討～20代8人のインタビュー調査に基づいて～」『社会福祉士』第12号，pp.64－72，保正友子（2005）「ソーシャルワーカーの専門的力量形成とキャリア発達についての検討～30代8人のインタビュー調査に基づいて～」『埼玉大学紀要教育学部（人文・社会科学）』第54巻第1号，pp.23－30等。
- (3) 金井壽広（2002）『働く人のためのキャリア・デザイン』PHP新書，p.140.
- (4) 岡田昌毅（2003）「第1章 ドナルド スーパー～自己概念を中心としたキャリア発達～」，渡辺三枝子編著『キャリアの心理学～働く人の理解＜発達理論と支援への展望＞』ナカニシヤ出版，p.10.
- (5) 前掲書(4)，p.11.
- (6) エドガー H. シャイン著，二村敏子・三善勝代訳（1991）『キャリア・ダイナミクス』白桃書房
- (7) 前掲書(6)p.45.
- (8) 前掲書(6)p.44.